



©Maria Baranova

コーラス隊『ルームフル・オブ・ティース』のメンバーと作曲家のブライス・デスナー氏

訂正『トリップティック』

先月号に書かせていただいた音楽劇について、今月号はその後編です。題名を『トリップティック』と書きましたが、『トリップティック』の間違いでした。お詫びして訂正いたします。同作品のワシントンD.C.公演を無事に終え、アムトラック列車でニューヨークに戻る車中にて記事を書いています。春のD.C.は桜がとても綺麗でした。会場となったジョン・F・ケネディーセンター内アイゼンハワー・シアターは、5年前にミュージカル『サイドショー』にて、照明家ジュルス・フィッシャー氏とベギー・アイゼンハワー氏両者のアシスタントとして働いたことのある劇場でした。今回劇場に足を踏み入れた瞬間、まるでフラッシュバックのように過去の記憶が戻ってきました。フィッシャー氏とアイゼンハワー氏がデザインした『プリング・イン・ダ・ノイズ、プリング・イン・ダ・ファンク』東京公演は衝撃的で、彼らの照明を勉強したいという強い希望は私の渡米を後押ししました。尊敬する大先輩と仕事を一緒にした5年前はまるで夢が叶った瞬間で、その同じ空間で今回はデザイナーとして働くことがどんなに嬉しいことか、舞台上上がってフォーカスし始めるまで気がつきませんでした。

ブライス・デスナー氏作曲、コード・アーリントン・タートル氏戯曲、カネザ・シャル氏演出、ArKtype制作の音楽劇『トリップティック』は、コンサート・バージョンと視覚的により多くのバラエティを伴うフルバージョンがあります。どちらもちょうど30年前にこの世を去った芸術家、ロバート・メープルソープ氏を讃えるために制作されています。ロバート・メープルソープ基金が管理する数えきれない彼の写真作品の中から厳選された写真約100枚を、音楽と共に振り返ります。どちらのバージョンも3月にそれぞれ初演を迎え、D.C.公演はフルバージョンのツアー第1回目でした。私を含むデザイナー陣は次のニューヨーク公演まで一緒に働きますが、その後、作品は私たちの手を離れます。照明チームからは私のアソシエイトが照明ディレクターという肩書きでツアー各地を巡り、現地のオペレーターとともにデザインを再現します。ツアー公演における照明にあてられる時間は8時間です。なるべくどの地でも手に入りやす

い器材を選定し、仕込み図面も照明ディレクター一人が与えられた時間以内に管理設営が可能なよう、器材の数を必要最低限におさえながら、演出家の求める光を設計しています。とはいえ、ヨーロッパやアジアの劇場でアメリカと同じものが同じ条件で揃う保証はなく、逆に現地のツイストが入って作品がどのように成長していくのかを見守るのも少し楽しみです。

今回の出張では多くの素晴らしい再会がありました。5年前にお世話になったアイゼンハワー・シアターの照明チーフは「ウェルカムバック！」と私を快く迎え入れてくれました。ニューヨークのファッションショーでよく一緒に働くD.C.を拠点にしているオペレーターが、たまたま『トリップティック』公演のフォーカスについて、朝一の集合で不意打ちの再会は感動的でした。私たちがアイゼンハワー・シアターで働いていた同じ週に、ケネディーセンター内でお隣のオペラ劇場では、ニューヨーク・シティ・バレエ団が公演を行っていました。同バレエ団の勤続20年ベテラン照明スーパーバイザーが昨年卒業したことを本人から聞いていましたが、後任について私は知りませんでした。昼休みにケネディーセンター近くのカフェで昼食をとっていた時に突然現れた知り合いの照明家が、実はその後任照明スーパーバイザーであることを彼から聞くことになり、驚きと同時にとても嬉しく思いました。同バレエ団史上4人目の照明スーパーバイザーという責任ある立場に就くことになったこれまでの経緯や、アメリカを代表するバレエ団の一つであるカンパニーの長い歴史の中で生まれた数々の素晴らしい照明デザインをどのように再現し後世に伝えるか、白熱灯からLEDに変わりゆく現場で色をどのように管理するかなど、とても興味深い意見交換をしました。

『トリップティック』はさらに磨きをかけ、2ヶ月後にブルックリン音楽アカデミーのオペラ劇場でニューヨーク公演を開催した後、ヨーロッパへと旅立ちます。